

ライト館の時代

# 帝国ホテル演芸場とベヒシュタイン

## ■100年前のピアノ演奏会

大正12年(1923年)のライト館開業から3年後の大正15年(1926年)。当時、東京音楽学校(東京藝術大学音楽学部・大学院音楽研究科の前身)に招聘されたばかりの二人の外国人教授、チャールス・ラウトルップ(デンマーク出身の指揮者・ピアニスト)、レオニード・コハンスキー(ロシア出身のポーランド人ピアニスト)の共演による、ベヒシュタインピアノを使用した

コンサートが「帝国ホテル演芸場」で開催されました。図版はこのときのプログラムです。実に100年近く前の演奏会です。

ライト館開業当時は、日本で西洋音楽の教育や演奏会が盛んになり始めた時代であり、海外から優れた教育者、演奏家が多数招聘されました。ライト館の2・3階に設計されたこの演芸場ではそうした二流の音楽家による演奏会が次々と開催され、新しい時代の首都東京における西洋音楽をはじめとした文化・娯楽の殿堂として、人々を魅了する存在になっていました。

このプログラムや前掲のポスターには「ベヒシュタインピアノ使用」と、ピアノを強調するように記載されています。本場の正統な西洋音楽を提供するのだという主催者の思いからでしょう。また当時ベヒシュタインについて「他の追隨を許さぬ、名実共に世界最善のピアノ」と謳い日本の総代理店と

なった日本楽器(現ヤマハ㈱)が、本場ドイツの最高品質のピアノを日本に導入することを通じて、日本の音楽文化を発展させようと情熱を燃やしていたことの表れかもしれません。

## ■日本のピアノ産業とベヒシュタイン

このコンサートの5年前、大正10年、日本楽器は技師4名を、世界のピアノ

